【解　説】

元禄三年（一六九〇）に大坂竹本座で初演（推定）、近松門左衛門作の時代物です。物語全体は源義経の伝説が元になっており、先行する幸若舞や能にも「烏帽子折」の作品があります。「伏見の里の段」は明治・昭和に上演記録がありますが、外題の書き方が様々で、同一曲であるかは定かではありません。昭和三十五年新橋演舞場での、四代竹本越路太夫と二代野澤喜左衛門による演奏の録音（CD「義太夫選集 竹本越路太夫」所収）がありますが、近年、人形浄瑠璃文楽での上演は途絶えています。

【あらすじ】

雪が降りしきる中、平家の追っ手から逃れる常盤御前と今若・乙若・牛若の三人の幼子たちは、伏見の里にたどり着き、灯りの点る家に一夜の宿を乞います。そこは弥兵平兵衛宗清の忍び妻、白妙の住家でした。実は白妙は、源氏の忠臣、藤九郎盛長の妹でしたが、宗清の手前、義朝ゆかりの人を泊めがたい、早く落ち延びるようにと勧めます。親子は軒端をすぐに去ることができず、凍えて倒れる母に子たちは自らの衣服を脱いで着せかけます。夜半に忍んできた宗清が陰から様子をうかがい、すぐさま常盤親子の素性を見抜きますが、「流石源氏の根ざしなり」と子たちの姿に心を打たれます。今夜だけは親子を軒の下においてと嘆願する白妙に、宗清は悩んだ末、彼らを追い払うよう白妙に言いつけ、弓矢をとって空矢を射ます。その音に驚いた親子は逃げ去って行きました。宗清は、このまま六波羅の役人に捕らえられれば、清盛公への言い訳がたたないばかりか、助けたいと思う白妙の心も無駄になると諭します。やがて藤九郎が現れ、宗清との対面を望みますが聞き入れられず、宗清は「古栖の雛を飼い育て、初音を揚よ」と、三人の幼な子の未来を暗示する言葉を与えます。藤九郎は宗清に感謝し、勇んで東へ下るのでした。

**のの段**

〽︎のになり よりの のひし の ほのかにて のかしどけなき を結び ばたる 伏見の里のり の軒さびて 問ふ人なる折からに いたはしや 平家に世をばせばめられ をに きかかへ参らせて ならはぬふみ迷ひ もも あづまからげはばきしめ り足こごへ 覚へずずとぼとぼと たどりたどりて にも人の墨染めや 桜の寺のに 宿はからねど里の名は 伏見にひける

常盤御前はともし火の影をに尋ね 大和へるなるが き者をして 雪に道を失ふたり 一夜のとければ 十八九なる女房かかげてに 親子の人々をつくづくと守り ハアいたはしの有様やな お宿たふはへ 平家のとして のを強く詮議の候 はとてが妹源氏の者なれ共 ふしぎの縁にて平家の侍 の忍び妻と候へば 今にも夫宗清殿り給はば をこそ見給はん なしとなぞよ わらはがつれなふ申すのもあなたがいとしさ いづくへなり共給へと いとのの 紙燭にけり

常盤も今は力先へもれず 後へは戻られず 頼みの綱もてておはせしが 心直し 只上は運に任せてともかくも は爰にさんと 少し風よぐに 小袖ののがいを のと肩しかせ 笠を屏風のひぢまくら 昔はに の風も寒かりし 身はならはしと身をて 兄弟に雪を払い打払い ふさよ千鳥 泣く泣くをさるる 間なくなく心なく 雪はこぼすが如くにて さつさつとくて 人のにしみ渡り 肌へをさす事 どきの如くにて いたはしや母上は れたる身をに破られ を苦しめば アアがたやとび 前後不覚に見へ給ふ

今若乙若驚きて ノウ悲しや母上様と をへさすり いかに乙若 母上の寒からんに物着せまさんと 兄弟とき身せばなる 小袖をで母上の裾や枕にとり重ね重ね 我はいとはでもるゝ 雪のはだか身なり 母は苦しき枕を アアいたはしの子供やな かり母を大切にいかに孝行なれば迚 わごぜ達をこごへさせ 親も冥加にるぞとよ 風ばしなべべ着よと すればで母に着せ イヤ我々は寒からず 侍のならひにはいか雪にもして よき敵に 寒しつめたしなんど迚 敵にを見すべきか 乙若も寒いといふな 兄上寒いとすな とかいがいしげにいふ声に 牛若目して 見るを見まねに衣を 同じく母に着せまいらせ 手足もふるひこごゆれども 其色見せず歯ぎしみし 拳を握りこたゆる 母は気もたへ目もくらみ 情なや浅ましや 百万の大将軍共仰がるべき若共に 一重の衣を着せるは いとおしの有様や 御身達が志 より厚ければ 母は着ね共なり かわいの者やこちよれと 三人一所にかきよせて きてぞ給ふ とこそへけれ

月もにば 弥平兵衛宗清 のに忍びしが 雪にうつろふ人影は 何者か怪しやとかざしよく見れば 常盤親子にまがひなし のござんなれ さじとひ 猶も様子を窺ひ見れば のあはれみの さすが源氏の根ざしなり いたはしさよ哀れさよ 今人々を助けし迚 源氏の運の末ならば ついにはさがしさるべし たとへからめたり迚 つきんづ平家御果報のにもよもならじ 情しらぬはの 殊に我妻の為には主君なり 助けてさんと思ひしが イヤしばし 主君清盛公の目がねを以て情をり ては道ず ては情なしと つつの思案 ムム、ム 、ムと斗り さあらぬ体にて戸をたたけば 女房柴の戸の 雪払いも とくとく庵へ伴ひける

今宵はなふ冷へ候ふ 盃と暖めて 暫くさいつさされしが イヤナフ宗清殿 自は源氏 御身様は平家 モシ只今にも義朝のゆかりとば サアいかがし給はん とうら問へば ハテいふ迄もなし 主君清盛公のば いかにおことが主なる迚用捨はならず 目にかからば搦捕て六波羅殿へる ガ只何事もしらぬが仏見ぬが花 と答へしが 親子の人々物腰の手ににへしを 女房はつと当惑の色目見て宗清 イヤコレ女房 表に小鳥共が軒につてかしましい アレやれ ノウ情なや ふくら雀がをなやみ 雪に折れふすしの竹の笹に一夜の仮の宿　さのみにいたくはいそ 夜もぬ床寒し 音せでおよれとすすめける イヤ某は 鳥の声をばとらではず 是非へ ハテ夜な夜なとまる小鳥ではなし 今宵の ハテ合点の悪い らばん と弓矢てかける 女房は人々の影隠さんとる もぎ放して四五本 射る音に 常盤驚き兄弟をにかきいだき　ほうほう給ひける

宗清とつくと見送りて アレあれを見よや白妙 雀共がるは逃るはハハハハハ イヤ女房 今ふた小鳥共 にしてば もし六波羅のイヤサ つてなばは 某にて の狩人にめれては清盛公へず 又おことが忠義もナア 最前もす通り 只いつ迄も雀々 と雀にへし若君は 成人の後今若君は鎌倉の 右大将ノ公とし奉る 乙若君はの公 牛若丸は公と末の世に秀で給ひし大将は 雪にこごへ伏見の里にて 親子四人を宗清が助けたるの 今の世迄も宮々の絵馬にもとしられたり

藤九郎盛長は人々にしが 宗清が放つ矢は妹がか いぶかしと庵に 事のをとどけ 横手をて涙をはらはらと流し 給へ宗清殿 これは白妙が兄源氏の藤九郎盛長にて候 心底によつて妹を殺し と勝負をせん為はりしが 只今の志 にがたし 一礼の為対面せんと言へば宗清 ハハハハハと笑ひ 又りの雀がつてよしなき事をるよな 某平家のを蒙りながら源氏の礼を 宗清がべきか チエエたる もも狩人のの高し にるなさしにさされな 古巣の雛をそだて初音をよ若者 と情の詞に ハハハア深き 身はひしびしをにも 厚恩は忘れ申さず チエエ頼もしきの 春はに帰り 源氏一味の 大将軍の羽がい たる旗はや むれる鳥のをならし のして見ぬのを見せん ホホホ タハハハハハ 尤々 急げや 山鳥の尾のしだれ尾のはれおと の鳥がなく さしてのが如くにりける 心はさすがの千里はね源氏の運 くる末こそけれ

【解　説】

宝暦元年（一七五一）十二月、豊竹座初演。並木宗輔(千柳)・浅田一鳥・・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、最期と都落を中心に脚色したもの。三段目までは並木宗輔が書きましたが、この段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させました。

【あらすじ】

源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「一枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣します。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをし、後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋へ連れ帰ります。その後、平家の陣から大将敦盛が現れ、熊谷は敦盛を追って、須磨浦で敦盛を討ち取ります。

熊谷が陣屋に戻ってくると、妻の相模と、敦盛の母藤の局が待ち受けています。藤の局は熊谷に「息子の敵」と斬りかかりますが、やむを得ず討ち取ったこと、敦盛が立派な最期を遂げたことを聞かされ、涙にくれます。そこへ義経が現れ、敦盛の首実検となります。その首を見て驚く相模と藤の局。熊谷は敦盛の身代わりに、実子小次郎の首を討っていたのでした。義経は、制札の言葉に込められた意味をよく察してくれた、正しくこれは敦盛の首であると熊谷を誉めます。

　法螺貝の音が鳴り響き、熊谷は出陣の用意に向かいます。陰で事の次第を聞いていた梶原景高は、鎌倉（頼朝）へ注進と駆け出しますが、石屋の弥陀六が投げた石のみで息絶えます。この弥陀六は、かつて幼い義経と母を助けた平家の武将、弥平兵衛宗清でした。義経を助けたことで今の平家の凋落となったと嘆く弥陀六。そこへ出陣の支度を調えた熊谷が現れますが、兜を脱ぐと既に髷を切っており、出家の意志を伝えます。一同は互いを思いやり、涙ながらに別れて行くのでした。

**熊谷陣屋の段**

涙にくれ給ふ

折節風に誘はれて耳を突抜く法螺貝の音、かまびすく聞こゆれば、義経は勇み立ち

「ヤアヤア熊谷、着到知らせの法螺の音。出陣の用意用意」

と、仰せに直実畏まり、急ぎ一間へ入りにけり。最前より様子聞き居る梶原平次、一間の内より躍り出で

「かくあらんと思ひし故、石屋めを詮議に事寄せ窺ふ所、義経熊谷心を合はせ敦盛を助けし段々、鎌倉へ注進」

と云ひ捨て駈け出す後より、はっしと打ったる手裏剣は、骨を貫く鋼の石鑿。『うん』とばかりに息絶ゆる

「スハ何者」

と云ふに立ち出づる石屋の親仁

「ハヽハお前方の邪魔になる、木っ端を捨てて上げました。扨幽霊の御講釈、承って先づ安堵。もふお暇」

と出で行くを

「ヤア待て親仁。コリャ、弥平兵衛宗清待て」

と義経のに。『はっ』と思へどそらさぬ顔

「ハレヤレマとっけもない。御影の里に隠れのない、白毫の弥陀六といふ、ヘヽ男でゑす」

「ハヽヽヽヽ。誠や諺にも、至って憎いと悲しいと嬉しいとのこの三つは、人間一生忘れずと云ふ。その昔、母常盤の懐に抱かれ、伏見の里にて雪に凍へしを、汝が情を以て親子四人が助かりし嬉しさ。その時は我三才なれども、面影は目先に残り、見覚えある眉間の黒子、ナコリャ隠しても隠されまじ。重盛卒去の後は行衛知れずと聞きしが、ハテ堅固でゐたな、満足や」

と、聞くより弥陀六つかつかと立ち寄り、義経の顔、穴の開く程打ち眺め

「テモ恐ろしい眼力じゃよな。老子は生まれながらに聡く、荘子は三つにして人相を知ると聞きしが、かく弥平兵衛宗清と見られた上は、ヱヽ義経殿。その時こなたを見遁さずば、今平家の立て籠もる鉄拐が峯、鵯越を攻め落とす大将はあるまいもの。又池殿と云ひ合はせ頼朝を助けずば、平家は今に栄えんもの。ヱヽ宗清が一生の不覚。これに付けても小松殿御臨終の折から、平家の運命末危うし。汝武門を遁れ身を隠し、一門の跡弔へと、へ祠堂金と偽り、三千両の黄金と忘れ形見の姫君一人預り、御影の里へ身退き、平家の一門、先立ち給ふ御方々の石碑、播州一国那智高野、近国他国に建て置きし施主の知れぬ石塔は、皆これ弥平兵衛宗清が涙の種と御存じ知らずや。今度敦盛の石塔誂へに見へし時も、御幼少にて御別れ申せし故御顔は見覚へねども、心得ぬ風俗はヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと、快く請け合ひしが、扨は命に代はりし小次郎が菩提の為、この浜の石塔は敦盛の志にてありけるか。ヘッヱいかに天命帰すればとて、我が助けし頼朝義経この両人の軍配にて、平家の一門御公達、一時に亡ぶるとは是非もなき運命やな。平家の為には獅子身中の虫とは我が事。さぞ御一門陪臣の魂魄、我を恨みん浅ましや」

と、或ひは悔やみ、或ひは怒り、涙は瀧を争へり。聡き大将義経

「ヤアヤア熊谷、障子の内の鎧櫃、ソレこなたへ」

「はっ」

と答へて次郎直実、出陣の出で立ちと好む所の大荒目鍬形の兜を着し、御目通りに直し置く

「コリャ親仁、その方が大切に育つる娘へ、この鎧櫃届けてくれよ。コリャ弥陀六」

「ヤア弥陀六とは。フウ宗清なれば平家の余類。源氏の大将が頼むべき筋は。ムヽ面白い。弥陀六め、頼まれて進ぜましょ。シタガ娘へは不相応な下され物。マア内は何でござります。改めて見ませふ」

と蓋押し開くれば敦盛卿

「ノウ懐かしや」

と藤の方、駈け寄り給へば蓋ぴっしゃり

「アヽイヤイヤこの内には何にもない何にもない何にもない、ヲヽマ何にもない。ハアこれでちっと虫が治まった。イヤナフ直実、貴殿への御礼はコレこの制札。一枝を切らば一子を切って。ヘッヱ忝い」

と云ふに相模は夫に向かひ

「我が子の死んだも忠義と聞けばもふ諦めて居ながらも、源平と別れし中、どふしてまあ敦盛様と小次郎を、取り換へやうが」

「ハテ最前も咄した通り、手負ひと偽り無理に小脇にひっ挟み、連れ帰ったが敦盛卿。又平山を追っかけ出でたを呼び返して、首討ったのが小次郎さ。知れた事を」

と鋭なる、咄に相模はむせび入り

「ヱヽ胴欲な熊谷殿。こなた一人の子かいのふ。逢はう逢はふと楽しんで百里二百里来た物を、とっくりと訳も云はず、首討ったのが小次郎さ、知れた事をとに、叱るばかりが手柄でもござんすまい」

と声を上げ、泣き口説くこそ道理なれ。心を汲んで御大将、勇みを付けんと

「ヤアヤア熊谷、西国出陣時移る。用意如何に」

と仰せに直実

「恐れながら先立って願ひ上げしの一件、かくの通り」

と兜を取れば、切り払ふたる有髪の僧。義経も感心あり

「ホヽさもありなん。ソレ武士の高名誉れを望むも、子孫に伝へん家の面目。その伝ふべき子を先立て、軍に立たん望みは。ムヽ尤も。コリャ熊谷、望みに任せを得さするぞよ。汝堅固に出家を遂げ、父義朝や母常盤の回向を頼む」

と親しき御諚

「ハヽア有難し」

と立ち上がり、鎧を脱げば袈裟白無垢。相模『これは』と取り付くを

「ヤア何驚く女房。大将の御情にて軍半ばに願ひの通り、御を給はりし我が本懐。熊谷が向かふは西方弥陀の国。伜小次郎が抜け駆けしたる九品蓮台、一つの縁を結び、今より我が名も蓮生と改めん。一念弥陀仏即滅無量罪。十六年も一昔、アヽ夢であったな」

と、ほろりとこぼす涙の露。柊に置く初雪の日影に融ける風情なり。

「長居は」

と弥陀六は、鎧櫃に連尺をかけた思案の締めくくり

「コレ、コレ、コレコレコレ義経殿。もし又敦盛生き返り、平家の残党かり集め、恩を仇にて返さば如何に」

「ヲヽヲヽヲヽ、ヲヽそれこそは義経や兄頼朝が助かりて仇を報ひしその如く、天運次第恨みを請けん」

「げにその時はこの熊谷、浮世を捨てて不随者と、源平両家にはなし。互ひに争ふ修羅道の、苦患を助くる回向の役」

「ヲヽサこの弥陀六は折を得て、又宗清と心の還俗」

「我は心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み教へを請けん。いざさらば。君にも益々御安泰。お申す」

と夫婦連れ。石屋は藤のお局を伴ひ出づる陣屋の軒

「ご縁があらば」

と女同士

「命があらば」

と男同士

「堅固で暮らせ」

の御上意に

「ハヽヽヽハア」

有難涙、名残の涙。又思ひ出す小次郎が首を手づから御大将

「この須磨寺に取り納め末世末代敦盛」

と、その名は朽ちぬ。武蔵坊が制札も、花を惜しめど花よりも惜しむ子を捨て武士を捨て、住み処さへ定めなき有為転変の世の中やと、互ひに見合はす顔と顔

「さらば」

「さらば」

『おさらば』の声も涙にかき曇り、別れてこそは出でて行く

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます

(一般社団法人　義太夫協会発行)